

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	さゆらぎ : 文苑
Author(s)	筑紫の人
Citation	龍南會雜誌, 119: 49-53
Issue date	1907
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6010
Right	

ほそき手にいさうしばめる
花の枝たわふに持ちて
たねがてにたどりゆくなり
をとめ子の咽びながらに。

あないまし心もとなと
追ひよればいらゑもねせで
すがたはや暗にまぎれて
われはげに森にさつけぬ。

椎の木の葉の香みなぎる
ほそたに
細谷の水のほとりに
かのすかたそごに見ゆると
そとよればをどめにあらず。

若櫻二もと三もと
谷づたふ嵐に散りて
はださむ
膚寒うたてなるなりけり

ふと雫水に落ちては

うつる影みだすとすらし。

花の魂いつちゆきけむ

紫微宮のあたりはのめく

五つ星色うるはしき。

さゆらぎ

花藻の夢

筑紫の人

春なやみ、花の旅路にゆきくれて

三井寺の鐘の音きくつゝあれば

あふ月じろのうはじらみ、

琵琶の湖の静けさや。かぢまくら

顯々の花藻のゆらぎあざやかに

近江富士、映し出でたる月の光に

夢か、はた、まぼろしか、白波の

さやぐ音、かすかに、すべる白帆や。

漁子^{あま}の夢ふかき今宵を

ひそかに、いと滑かに行く舟の
海幸^{うみさち}いかに珊瑚樹^{さんごじゆ}か阿古屋珠^{あこやたま}か
はたしらす戀の貢^{みつぎ}か——汝^{なれ}こそ
花顫^{はなふる}ふこぬれの下に栖^すむ白鷺^{しらさぎ}の
夢のあはひにかもされて、圓^{まる}かに
はらむ白帆^{しろふん}の身ざまなれや、——
ゆくがごと、淀^{よど}むが如く、なよくと。

聞^きけ、春の夜の花香^{はなのか}ふくむ軟風^{そよかぜ}に
そゝろ浮^うび漂^すふ鐘の聲は
ひろひろの水波^{すゐは}をつたひ
九重^{ここのへ}の嚴^{ぢぢ}の坐^まに牡丹花^{ぼたんか}まどふ
夢^{あま}、甘^{かん}きあでびとに何をささやく。——
あゝ、眩耀^{げんりやう}さゆらぐ燭光^{しよくかう}のもと
ねをびれに、みどりのみ髪^{みかみ}
縋^よれまどふ雪額^{ゆきのひたひ}、はた、
戀^{こひ}のしたより、あふれんの紅頬^{あけのほ}に

ほふ笑み浮ぶあへかさよ。

月かたむきて鐘の聲

いつとなく花の臺^{うたな}に消^うねゆけば
白帆^{しろふん}はや着^ききぬらん、彼方^{あつち}なる

花多^{はな}き岸^きに。霞^{はろけ}む帆影^{ふかげ}のちらほらと。

柘榴の歌

常夏^{じょうなつ}の日は赫灼^{あかくやく}と

日ざかりの熱^{あつ}に倦^うんじて

ねび顔^{しなれ}の枝垂^{しだれ}柘榴^{じやくろう}は

炎^もゆる口^{くち}、紅く開^{ひらく}きぬ。

その影は嘲^{あざわら}るごとく——

肩^{かた}黒^{くろ}の里^{さと}の睦^{むつ}れ子^こ

水泳^{みづなよ}ぎ、戯^{あそ}れわめく

叫喚^{きうくわん}と、水のごよみと。

蹤^{あと}もなく消^うねての後^{のち}は

氣は重く熱蒸かへりて、
川原岸、水すみ渡る、――
温かき水脈に揺らへり。

榛森に日の夕づけば
蔭ながく、涼風たちて、
黄々に咲く川原柴胡は、
をちこちに生づきたるか、
鶺鴒も聲、美しく
伸羽して翔りゆくなり。

水面の柘榴のかげは
徐ろに薄れゆけども
日と闇の、けちめも分かで
口ぶとに笑み驕りつゝ
天てらす信の日神を
忘しては常水鏡、
幸、足らふ常若ぶりを



映さんと希ふ果なさ。――
吹き上げの水は新に
をやみなく天に向へど
一向に、ちぎれちぎれに
又、汚池に降らでやむべき。

常笑か、あらず柘榴の
運命こそ悲しからずや。――
やがて來ん秋のてだれに
凋落の姿、たちまち
身は、はるな、水に墮ちいり、
絶えまなき流轉の身末。
信の日は高う耀せど
水のへに映らふ影は
いたづらに、呪ひ嘲る
枯枝の樹のたゞすまひ。

花 賣 少 女

花にかくるゝ石燈籠

苔、若みどり香をたかみ、

杉の深森のこじめりを

そと、脱けいでし狹小鹿の

偃曝や、はるびより

角の生芽のおそばゆく

花の大樹に頭摩る。

ときしもあれや、花賣女

姉様かむり頬もあかく、

露けき花の山幸を

脊負ふ花籠の紅ゐの

紐に纏はる、みどり髪

罪はないもの、春風に

なびくを見れば少女さび。

都の人に、たのまれし

花の色々たぐへ眺て

束ぬるなべに、置くなべに、

人慣鹿は寄りゐつと

かたへの籠の花をひく。――

變化、少なき青天を

白雲ゆたに流れゆく。

柳並木の末霞む

都大路の祇園會に、

戀もまじりて美しくう

をちこち見ゆる花賣女

こゑ晴れやかに浮あゆむ。――

都の人はれぎぬに

少女の胸もさわがれて。

格子の人にもの呼ばれ

はぢらひがちの應して

きよめられたる門のまへ

花籠、をろす花賣女、

花のありかす間はるれば、
今朝初咲の櫻草

悪くや、小鹿にうばはれて。

さ　　さ　　や　　さ

白

月

天を仰げばまたきて
星のまなざしうるほひぬ
銀河斜に影うすく
闇は木末を壓したり
寂かなるかな遙か過ぐ
無象の翼かるやかに

溪川の水涸れ果て
落葉に隠るわびしさや
空山まれに鳥鳴けば
驚いて風わたりゆく

あゝさびしさに堪へぬ身は
さゝやく聲のしたはしく

窓前の芭蕉破れては

西方にゆく雲はやくして

若竹すでに花さけば

そよざさわめく音も絶わて

あゝいたづらに木枯の

暮さわがしきひゝき哉

やさしげに訪ふさゝきやよ

人の子の耳におからは

去りても空に行けよがし

されどやさしさ好む子の

胸の小さを尋ね得ば

しづかに地にくだれがし

疑惑煩悶多き世に

さゝやく聲の生れ出で